

2026年10月11日 教会音楽月間③

説教題『苦難を生きる友へのエール』ヨハネの黙示録7章9～17節

主任牧師 加藤 誠

「長老はまた、わたしに言った。『彼ら大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。』(ヨハネの黙示録7章14節)」

教会音楽月間の三回目の礼拝。今朝はヨハネ黙示録の「神の国の大群衆の賛美」の場面から賛美について学びたいと思います。最初に結論をいうと、今朝この個所から聴くのは、私たちの賛美は、礼拝に集った者だけの賛美で終わってはならない。「神の国の大群衆の賛美」につなげられる賛美であると同時に、この世界で「苦難を生きる友へのエールの賛美」でありたいということです。

ヨハネ黙示録7章は「神の国の大群衆の賛美」を描いています。あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民、数え切れない大群衆が、神とその独り子、小羊なるイエスを、ほめたたえて歌うのです。「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、代々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン」(12節)と。肌の色も、髪の毛や目の色も違い、文化も考え方も違う。そのために地上ではなかなか仲良くできないでいる者たちが、主イエスの十字架の救いにあずかり、神に愛され赦されている一点において一つとされ、一緒に神に賛美をささげている。これは圧巻の光景です。そして、もはや飢えることも渴くことなく、その目の涙をことごとくぬぐわれて賛美を歌う姿は、神の国の完成の希望として私たちを励ましてくれます。

10年前に御許に召された新田義男さんが召される直前の日曜日。礼拝前の教会学校のクラスでこの黙示録をみんなで読み、満面の笑顔でうれしそうに語られていた姿を、葬儀の追想の言葉で山本輝義さんが語られたことが深く心に残っています。新田さんはどうしてこの個所がそんなにうれしかったのでしょうか？皆さんはこの「神の国の大群衆の賛美」の場面をどのように受け取られますか？

ここで賛美している者は「大きな苦難を通ってきた者」「その衣を小羊の血で洗って白くした者」と紹介されています(14節)。なぜ彼らは苦難を受けているのでしょうか。彼らが生きている世界が「神を神と認めず、小羊を小羊と認めない悪魔的な力」が嵐のように吹き荒れている世界だからです。「自らを神とし、自らの力を誇り、自らの栄光を求める悪魔的な力」(ローマ皇帝の支配)は、自らの支配に従わず、批判する者に容赦なく鋭い刃を向け、十字架のイエスを神の子と信じて「栄光と力は神のもの！」と賛美するような者の口を封じようと躍起になるからです。「しかし神は彼らの苦難の中に共にいましたもう。この世界でどんなに傷を受けようと、彼らは小羊の血で洗われ白くされ、神のもとで喜びの賛美を歌う。だから大丈夫！」と、黙示録7章は、今この世界で苦難を生きる友に天からの賛美のエールを届けているのです。

また、ここで賛美をささげている者たちの服が「小羊の血で洗われ白くされた！」ということは、とても大切なことを語っています。一つは、神の国では誰ひとり自前の服を着ている者はいない。小羊の血で洗われ白くされた服を着ている者しかいない

ということです。例えば、地上で立派なきらびやかな服を着ていた人。その人はその服のままで神の国に入ることはできません。「いやだ。あのお気に入り服をそのまま来てほしいのだ」ということはできない。「自分は小羊の血で洗われなければならないということを知っている人」だけが神の国に入ることを許されるからです。

もう一つは、地上でどんなにボロボロの服を着ていたとしても大丈夫。私たちの服は皆、小羊の血によって洗われ白くされる。その白い衣は、主イエスの救いの確かさと希望を示しています。神の国の大群衆の中には、十字架のイエスを「神の子」と告白したゆえに理不尽な苦難を受け、服がボロボロにされた人たちがいることでしょう。また福音書で主イエスと出会い、神の御業を賛美して歩むようになった人たちも大勢そこに招かれていることでしょう。例えばゲラサの墓場で鎖につながれてきた男も、ベトザダの池のほとりで38年もの長い間放置されてきた男も。彼らの地上での服は体臭にまみれて汚れきっていたことでしょう。その汚れた服は、病気のゆえに彼らが生きてきた不条理な苦難をそのまま意味しています。が、その彼らの汚れた服（不条理の苦難）が主イエスの救いにより洗われ真っ白に輝く衣に変えられて、彼らは神の国で賛美する者とされるのです。その意味で、この「神の国の大群衆の賛美」は、今地上で不条理の苦難を生きている一人ひとりに「大丈夫。あなたが生きている不条理を主イエスが共に歩んでおられ、あなたは神の国で白い衣を着て賛美を歌う者とされる！」という励ましのエールを届けているのです。

「病院ラジオ」という番組があります。漫才コンビのサンドウィッチマンが病院を訪ねて一日ラジオ局を開き、その病院に通院し入院している患者さんの投書を紹介したり、患者さんが二人を訪ねてきてトークをし、最後にその方のリクエスト曲を紹介する番組です。「こんな病気があったのか」と自分の不明を知らされ、命を生きる重さと厳しさを前に厳粛な思いにされられると同時に、一人ひとりの病気に寄り添う家族や医療従事者の方たちの優しさに深く教えられる番組です。そして、それぞれがリクエストする曲を聴いていると、歌というものはこのように苦難を生きている人たちの心をつなげてエールを届けるものなのだ…ということを教えられます。

黙示録7章の「神の国の大群衆の賛美」もまた、世界中で今いろいろな苦難を生きている友たちへのエールとして歌われているのであり、私たちが今日この礼拝堂で歌う賛美歌も、その神の国の大群衆の賛美につなげられて、今この世界で苦難を生きている友へのエールとなることを祈って賛美していきたいと思うのです。

そして、もう一つ覚えてほしいことは、黙示録の「神の国の大群衆の賛美」は、教会に生きる私たちに与えられている「神の国の希望のビジョン」だということです。今の時代は、さまざまな不安の種があふれ、人間的には希望が持ちにくい現状があります。しかし私たち教会が主イエスから招かれているのは神の国に向かう希望の歩みです。神は私たちの苦難の中に共に歩みたまう。神は、言葉や文化、肌の色の違いを超えて、またさまざまな歴史的な悲しみを越えて、私たちが一つの賛美を歌う日、神の国を用意してくださっている。私たちはその「神の国のビジョン」に向かう希望のもとで、天に向けて顔を上げ、希望の賛美を歌いながら歩んでいきたいのです。